



春が来ました♪ さっそく、あちこちから花の便りが届き、腰が浮いてしまいます。さて、この通信の人気コラム「歩く植物図鑑」の今号は「ガマ」。先生は「長いです」と心配してくださいましたが、全文を掲載します。一つの植物がいかにも人間の暮らしと深く結びついてきたか、そして今はどれほどそこから遠くなってしまったか、驚かすにはいられません。今度道端でガマを見かけたら、じっくり見てみます！

秘境！奥増富探険 知る人ぞ知るパワースポット

1月6日 増富は小淵沢から車で50分程、奥には瑞牆山、金峰山を控えた、ラジウム温泉として有名な温泉郷です。そこから本谷川沿いの遊歩道は紅葉が素晴らしいことでも有名です。さて！今回は紅葉だけではない、

増富のさらに奥深い魅力を感じるウォークに誘っていただきました。

金鉱(跡)はどこ？

最初はなんと金鉱(跡)探し。興味津々。脇道を入っていくと「金鉱跡入口」という、小さな標識がありました。途中まで一応道らしいものはありましたが、その後は道なき道、急登。本当にこんな急な所に金鉱があったんだらうか？しばらく行くと石がゴロゴロ集積している斜面に出了ました。「ズリ場」と言うそうです。穴を掘ったときに出てくる石を投げ捨てた所だとか。ものすごい数の石と岩です。名前の通り？ズリズリと落ちそうになるので、慎重に。しばらく登って行くと岩の壁

が行く手を阻んでいます。その手前に細い岩が裂け目のように開いていてどうも、これが金山の入り口らしい！

案内人・小山さんが這いつくばって中に入って行きます。交代で私たちも少し中へ入ってみました。今はあまり奥までは入れないようです。

さらに進んで行くとまた鉱山の入り口と思われる穴のある岩の壁が現れました。こちらの方は人が入っていきけるような大きさではなく、入り口から覗き込んでも暗くて中は見えません。他にも何か所か金鉱跡があるらしいのですが、きょうはここまで。

不思議な出会い

次の探索目標は『金山彦命の祠』です。この金山彦命は神話に出てくる鉱山を司る神様で、昔からの鉱山にほとんど祭られている神様のようです。ナラやヒノキ、ホウの林の広く急な斜面をあちこち登って行きますが、それらしい祠は見つかりません。諦めて戻りかけると向こうから年配の男性が歩いてきます。尋ねると「ああ、それならその大岩の向こうに灯籠が二つあって、そこから上に登って行ったところがそうだよ。でも祠は壊れて台座が残っているだけだよ」なんと！地元の猟師さんとのことですが、私たちは「この人

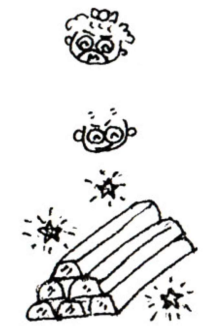
は増富温泉の仙人だ」と言い合いました。

「仙人」に言われた通り岩の向こうに行ってみると、灯籠が確かに二つ残っていて、見上げると上の方になにやら石を積み上げた台座らしきものが見えます。斜面はほんとに急で、しかも落ち葉が積み重なって滑りやすく、周りの笹や灌木にしがみつきながら登って行きます。やつとのことで、石積み台座の所に辿り着きました。祠があったであろうところには赤松の倒木。

「よくこんな森の奥深く、しかも急斜面に祠を建てたものだ」と感心しつつ、ここを教えてくださいました「仙人」との偶然の出会いに不思議な縁を感じる一行でした。

増富は宝の山！

その後は「針の山」へ。そこから流れ出る「陰の川」「陽の川」はパワースポットでもあるらしい。さらにここは金峰山への御岳道として多くの修験者が通った道でもあるとのこと、まだまだ興味深い歴史や文化が人知れず眠っている。まるで宝探しと言った一日となりました。



渡嘉敷裕之の
歩く植物図鑑
No.37
ガマ

- 1 穂綿
- 「因幡の白兔」といえば、幼いころに読み聞かされた赤裸のウサギを思い出す。それに小学生のころ学芸会の劇に出てきた赤裸のウサギがガマの「穂綿」に包まれて、めでたしめでたしとなった一幕が目につく。
- 大国様
- 一、大きな袋を肩に掛け
大国様が来かると
ここに因幡の白兔
皮をむかれて赤裸
- 二、大国様は哀れがり
「きれいな水に身を洗い
ガマの穂綿にくるまれ」と
よくよく教えてやりました
- 三、大国様の言うとおりに
きれいな水に身を洗い
ガマの穂綿にくるまれば
兔はもとの白兔
(尋常小学唱歌 明治38年
石原和三郎作詞)
- この「大国様」の歌詞は古事記にのこる神話が出典で、大国生命の話である。
- 古事記には——ここに大穴牟遲の神、その菟に教へてのりたまはく、「今急(と)くこの水門に往きて、水もちて汝が身

を洗ひて、すなわちその水門の蒲の黄を取りて、敷き散して、その上に 輾(こ)い転(ま)る(び)なば、汝が身本の膚のごと、かならず差(い)えなむ」とのりたまひき。——と記され、「穂綿」とは記されていない。「蒲の黄」とは花粉のこと、前記の小学唱歌では大国生命は「『ガマの穂綿にくるまれ』とよくよく教えてやりました」となっているが、皮をむかれて赤裸になったウサギが敷き散らしたのは、ガマの穂綿ではなく花粉である。赤裸の身に振りかけたのも花粉である。言うまでもなく、黄色く見えるのは花粉の他にはない。雄花穂についている受粉前の花粉に限られている。

「穂綿」はどんな代物なのか。真っ直ぐ立っている茶褐色の柱状の穂を見たのでは、とても想像できない。植物図鑑などの書を見ても、その多くは円柱状の穂の写真や線画は載っているものの、「穂綿」の詳細な図は先ず見当たらない。「穂綿」は極めて繊細にできており、ガマの穂から出てくるとはとも思えないほど、特異な形質である。茶褐色の円柱状に見える、いわゆる蒲の穂は、何千何万というおびただしい数の種子と綿が凝縮された状態である。種子はいたって小さく、1mmにも満たない小粒で、その下に長さ1cmほどのクモの糸のような細かい軟毛が、十数本ついている。これ

は花被片の退化したもので、その毛が「穂綿」である。ガマの穂の茶褐色でピロッド状の円柱の部分は雌花の名残なのである。つまり、穂の軸を中心についている種子(心皮)の先(花柱)が1cmほど伸び、その先に残る茶褐色柱頭の集まりである。この円柱を「雌花穂」と称し、その先のやや細い黄褐色の棒状の部分が花粉の集まりで、「雄花穂」である。

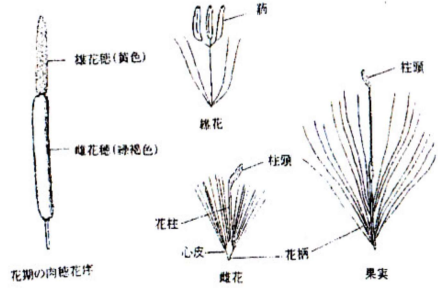
雌花穂は受粉が終ると茶褐色になり、晩秋にほぐれ、種子を付けた穂綿は軽々と風に乗って空中を流れていく。まるで煙が舞い上がるかのように、昔の暮らしては晩秋の風物詩であったかもしれない。ところが、これが家の中だと大変なことになる。昔を懐かしみ、ガマの穂を花瓶に活けておいたのは良いが、ある日のこと、にわかには穂がくずれて、一斉に穂綿が浮き上がった。部屋中をただよう始末、箒で掃き寄せようとすると、かえって舞い上がり、もう電気掃除機にたよるほかにはなかった。

穂綿はまさに綿のようで細く軽いものだから、うっかりすると目に入り、毛についた小粒の種子が角膜炎を痛めることがある。あるいは鼻から吸い込んでしまう危険もあり、穂綿の観察にはメガネとマスクを用いると良い。また、よく燃えるので注意を要する。その軽い毛は、もともと種子

を広範囲に飛散させるために進化したもので、典型的な「風散布」と言ってもよい。微細な種子は穂綿に乗って、容易に種子をより遠くまで移動させ、その結果他の植物では例を見ないほどの広い分布を示している。北海道九州はもとより、北半球の温帯から熱帯にかけて、さらにオーストラリアにおよんでいる。繁殖力は非常に強く、池や沼の浅い所に群落を作る、典型的な「抽水植物」(注1)である。昔は至る所にあつた水湿地でよく普通に見られる身近な植物であつたことは言うまでもない。今に残る新潟県の「蒲原」や滋賀県の「蒲生」などの地名からもそれと解る。ガマの茂る原野を開いて田を作つた所では、「がまた」「かまた」の地名が生ずる場合が多く、東京大田区

の「蒲田」は、その一例である。なお、「鎌田」の小地名も蒲田から転じたものとみられる。
2 ガマの花粉
花粉を薬として用いたのは赤裸のウサギだけではない。暮ら

しの中でも大事な傷薬で、奈良時代以前から用いられていた。漢方ではガマの花粉を集めたものを「蒲黄」(ぼおう)と称し、傷口にふりかけるなど、止血剤として今でも用いられている。このような事実から推察すると、赤裸のウサギの治療薬は、ガマの穂綿ではなく、ガマの雄花穂を敷き並べ、その花粉によることが充分考えられる。



いゆる蒲の穂は、初期のころ(花期)には、下部の雌花穂は緑褐色で、また穂綿はできず、赤裸のウサギの治療に役立つものは何もない。一方上部の雄花穂は黄色で、花粉を盛んに放出している。このようにガマの穂の仕組みを観ると、古事記に記されている「蒲の黄」はこの花粉にほかならない。

3 和名考
今日思い出す「がま」といえば、せいぜい「がまの油」か「がまぐち」であろう。けれども、これらはガマガエルとの関連はあつても、植物のガマとのつながりはない。植物のガマと日々の暮らしとの深い関わりは、今日では遥かに遠くに隔たつてしまつたが、その歴史は長く、千年もそれ以上も遙か昔にさかのぼる。

「ガマ」の和名は古くは「カマ」で、葉や茎を編んで「むしろ」を作ることから、もともとは「組む」が語源で、「クム」「カマ」「ガマ」の転化という。

なるほど、ガマの葉は長く、しかもほどよく1cmほどの幅があり、スゲよりも厚みもあつて軽く、組み合わせれば、容易に敷物ができあがる。夏の薄縁には適していたことだろう。それどころか、イグサによる畳が普及するまでは、ガマの葉は大いに用いられ、敷物として暮らしに深く溶け込んでいた。宇都宮貞子著「植物と民俗」によると、

「長野県北安曇郡小谷村の深原では、近代に至つても『ガマこざ』を用いていたという。家の中へ敷いたほか、新しい物を一枚巻いて用意しておいて、来客の時には上がりばな(板の間)へ、それをサツと広げて敷き、腰を掛けさせてもてなした」という。またガマの茎は軽いので「たばき」(後世の脚絆、「はばき」ともいう)を編むのに向いていた。かつて信州の栄村では「ガマハギを昔よくこさえたでも、これは雪つかぬし、足軽くていあんだ。ガマはジクタミに作つていて、そつくら日陰干しにする。根元から二尺丈に切つた白れとこを編むでも、その前に湯で湿めしてやあつこくして、でっけのは裂いてからやらんだ。」

と言う昔話が残されている。ガマの茎はスゲや藁などよりも軽く、しかも暖かくて利用し易かつたらしく、冬には専らガマハバキが重宝したらしい。信州の中郷では、「冬はガマハバキ、夏はネエゴハバキ」といつて、

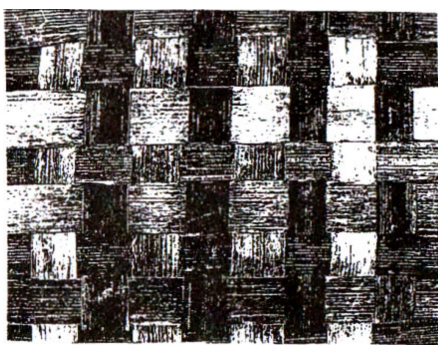
「昔はガマの茎で雨具や脛巾(はばき)作つたども、ガマ脛巾は軽くて、水しよま(滲み)ねし、冬はのくとい。」と。
4 暮らしの中で
ガマと人の暮らしとの関わりは深く、ガマは草本植物にしてはかなりの有用性に富んでいる。生長した葉は「こざ」や「はばき」を組む素材に用いられた。

(注2) 若葉は山菜として用い、なお地下茎もでん粉を含んでいるので食用にしていた。また前述のように、花粉は、蒲の黄、と言われて傷薬に使われてきた。花被から変わった冠毛は、穂綿としてさらに重用で、体の保温材料として、また火打石で火を起こす際の火口(ほくち一つけ木)の材に重宝した。火口への利用の歴史は意外に長く、石器時代から近世に至つてマッチが普及したころまで、スキの穂、桐炭、おがらの皮、キビの茎、稲藁と共に活用されていたという。

ガマの穂綿は火の付きが良く、旅行用に好んで用いられ、特別に「旅火口」の名までつけられていた。ことに、刻み煙草の好事家にとつては、必携であつたに違いない。なお、ガマ製の火口はガマの茎からも作られ、焼いた茎の消し炭を粉にしたという。なかなか念のいったことだ。さらには、ガマの穂から明かりも得ていた。穂をかかわして油を塗り、松明(たいまつ)やローソクの代わりにしていた

という。因みに茎といえは、軽いうえにふんだんに得られることから、すだれの素材に好適だつたという。一方穂綿の利用は、わが国でワタの栽培が始まる以前は、大量に用いられていたに違いない。寝具のふとんには打つてついで、どれほど重宝したところか。今日では「布団」と書くのが普通になつてはいるが、昔は「蒲団」と書いたもので、いかにガマが暮らしに深くつけこんでいたか、その事実を如実に物語っている。

だが、このようなガマから受けた恩恵は、今日ではほとんど忘却の彼方である。今一つ普段の生活の中で見られるのは、活け花に添えられる蒲の穂である。それさえもごく稀で、時に茶褐色の穂が花屋の店頭の間ですつくと立っていることはあつても。(注1) 根を水底におろし、茎や葉の下部は水中に入り、上部を空中に伸ばす植物。(注2) ガマはヨーロッパにも広く分布し、かつて欧州では葉を屋根ふきに用いた。



組んだガマの葉